論　文

マックス・ウェーバーとロシア(3)

――ロシアにおけるウェーバー――

小　島　　定

目次

1　はじめに
2　ウェーバーの著作のロシア語訳について
3　ウェーバーとロシアの同時代人
(1)ウェーバーのロシア革命論の反響
(2)ボグダン・キスチャコーフスキーとウェーバー
(3)フョードル・ステプーンとウェーバー
(4)ロシア在住の学者とウェーバー
(5)ウェーバーの『ルースキエ・ヴェードモスチ』紙への公開書簡(1909年3月17/30日)
4　セルゲイ・ブルガーコフとウェーバー
(1)「国民経済と宗教的人格」(1909)
(2)『道標』論文「ヒロイズムと禁欲」(1909)(以上本誌第10巻3号)
5　1920年代のロシアのウェーバー研究
(1)ウェーバーの翻訳とロシアの西洋古代・中世史研究
(2)ペトルシェフスキーと「ブルジョア史学」攻撃の開始
(3)A.И. ネウスィーヒンのウェーバー研究(以上本誌第11巻1号)
6　現代ロシアのウェーバー研究の動向(1)――概観
(1)ウェーバー著作集の刊行とウェーバー研究のモノグラフ
(2)ロシアにおける「ウェーバー・ルネサンス」の現状――ウェーバー研究の概観(以上本号)
7　現代ロシアのウェーバー研究の動向(2)――ユーリー・ダヴィードフのウェーバー研究(以下次号)
(1)ダヴィードフのウェーバーへの接近(60年代末－70年代)――ロシアにお

けるウェーバー新研究の「醗酵」
(2) 西欧のウェーバー新研究の受容と批判
(3) ウェーバー理論とロシアの諸思想との「対審」
(4) 現代理論社会学史におけるウェーバー

6　現代ロシアのウェーバー研究の動向(1)――概観

「ロシアにおけるウェーバー」という問題設定のもとで、われわれはこれまで、ウェーバーがロシアで受容された二つの時期があったことを確認した。第一に、すでに帝政期にウェーバーと彼の同時代のロシアの自由主義的な学者やインテリゲンツィアとの間に、それぞれ一定の思想的な内容を伴う、直接間接の交流があったという事実、とりわけウェーバーの1905年ロシア革命論への一定の「反響」とセルゲイ・ブルガーコフによる「プロテスタンティズムと資本主義の精神」への着目があったということ（本稿(1)の３、４を参照）。第二に、ソヴェト時代に入った1920年代の半ば頃に、西欧古代・中世史研究の分野で、歴史学の方法論をめぐってウェーバーの理念型概念を「歴史分析の具体的用具」として――マルクスの史的唯物論を「補完」するものと評価しつつ――「受容」しようという試みがあったということ（А・И・ネウスィーヒンのウェーバー研究、本稿(2)の５参照）。しかしながら、帝政期からソヴェト時代初期に見られたこうしたウェーバーへの関心も、1930年代以降は、教条的なボリシェヴィズムの専一的イデオロギー支配とスターリン主義的な学問抑圧の下で完全に窒息せしめられ、以後およそ半世紀にわたってソヴェト・ロシアには、ウェーバーの学問的遺産に立ち入った本格的な研究はついに現れることが無かった[(1)]。しかしながら、このウェーバー研究を抑圧してきたソ連社会主義体制が崩壊し、ロシアが新たに再資本主義化の道を選択した後の今日、われわれは、新たにウェーバーへの強い関心とウェーバー研究の大きなうねりがロシアに生じている事実に止目しないわけにはいかない。ウェーバーの名前が、学術的な専門雑誌のみならず、一般読者を想定した雑誌や新聞に頻繁に登場するようになったのも、

ペレストロイカの時期、ほぼ1990年を前後する頃であった。ときに「ロシアにおけるウェーバー・ルネサンス」とも呼ばれるこの現象は、ロシアにおけるウェーバー研究史というわれわれの枠組みから見れば、「第三番目の」大きな波をなすものといってよいであろう。しかも、これは再資本主義化と学問の自由化という、ロシア史においてはまったく新しい条件（ロシアの「文化的開国」）のもとで生じた、「新たな」内容を有するウェーバー研究の登場でもある。果たして、今なぜロシアでウェーバーが問題になるのか、ウェーバーは現代ロシアでどのように受け止められているか、またそのウェーバー研究にはどんな特徴が見られるか、以下本稿では現代ロシアのウェーバー研究の動向を探ってみることにしよう[(2)]。

（１）ウェーバー著作集の刊行とウェーバー研究のモノグラフ

まずはじめに、現代ロシアのウェーバー研究の状況を、外側から眺めてみよう。第一に、1990年代に入って、ウェーバーの主要な作品を収めた二つの著作集が相次いで公刊された、という事実を指摘しておかなければならない。これによってロシアではじめて、一般読者がウェーバーの主要な著作に直に触れることが出来るようになったといえよう。①1990年に刊行された『ウェーバー著作集』（Макс Вебер, *Избранные произведения*, пер. М.И. Левиной, А.ф. Филиппова и П.П. Гайденко, сост. общ. ред. послесл. Ю.Н. Давыдова и предисл. П.П. Гайденко, М., 1990.）と、②1994年に刊行された『マックス・ウェーバー選集・社会像』（Макс Вебер, *Избранное, Образ общества*, пер. М.И. Левиной, А.В. Михайлова и С.В. Карпушиной, отв. ред. и сост. Я.М. Бергера, С.Я. Левита и Л.Т. Мильской, М., 1994.）がそれである。これら二つの著作集に収録されたウェーバーの作品については、すでに本稿(1)の２「ウェーバーの著作のロシア語訳について」の章（本誌第10巻第３号、165－166ページ）で紹介したことがあるが、いまロシアではウェーバーの作品のなかのどんな著作が注目されているかを伺うことも出来るので、あらためて紹介しておこう。

①『ウェーバー著作集』（1990年）の目次

序文　ペ・ペ・ガイデンコ「マックス・ウェーバーの社会学」

第一部

「宗教社会学論集・序言」

「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

「プロテスタンティズムの諸教派と資本主義の精神」

「宗教的現世拒否の諸段階と諸方向の理論」（「世界宗教の経済倫理・中間考察」）

第二部

「社会科学および社会政策的認識における『客観性』」

「文化科学の論理学の領域における批判的研究」

「理解社会学における若干のカテゴリーについて」

「社会学および経済学における『価値自由』の意味」

「社会学の基礎概念」

第三部

「職業としての政治」

「職業としての学問」

跋文　ユ・エヌ・ダヴィードフ「『世界像』と合理性の諸類型（マックス・ウェーバー社会学の遺産研究における新しいアプローチ）」

注釈（ア・ア・フィリポフ）

②『マックス・ウェーバー選集・社会像』（1994年）の収録作品

「宗教的現世拒否の諸段階と諸方向の理論」（中間考察）

「世界宗教の経済倫理・序論」

「宗教社会学」（宗教的ゲマインシャフトの諸類型）

「都市」

「古代文化没落の社会的原因」

「音楽の合理的、社会学的基礎」（音楽社会学）

〈付録〉

カール・ヤスパース「マックス・ウェーバーへの追悼講演」(1920・7・17、ハイデルベルク)

ラインハルト・ベンディクス「マックス・ウェーバーの社会像」(1960)(抄訳)

アレクサンドル・ネウスィーヒン「マックス・ウェーバーの『経験社会学』と歴史学の論理」(1927)、「マックス・ウェーバーの社会学的都市研究」(1923)

前者の著作集①は、今日のウェーバー研究の代表者であるダヴィードフと、戦後もっともはやい時期にウェーバーに着目した哲学者ピャーマ・ガイデンコ、この二人の編集になるものである（ちなみに彼らは夫婦である)。そして、ご覧の通り、これにはガイデンコが序文「マックス・ウェーバーの社会学」と題する論文を、また跋文としてダヴィードフが「『世界像』と合理性の諸類型」という重要な論文を寄せている。また、②の著作集は、西欧の近代社会科学基本文献の翻訳シリーズ、ユリスト出版社の「文化の顔」シリーズの一冊として刊行されたものであるが、その編集者には、ネウスィーヒンの弟子である中世史学者ミーリスカヤが名を連ねている事実も、ここで指摘しておいてよいであろう。本書には、ご覧の通り、付録として、ヤスパースのウェーバー追悼論文、ベンディクスの「ウェーバー――その知的肖像」(抄訳)と並んで、ネウスィーヒンの２本の論文が収録されている。そうした関係もあって、ミーリスカヤが、本書の編集者に加わったのであろう。ちなみに現在、彼女は、20年代のペトルシェフスキーとその問題提起を継承したネウスィーヒンの西洋古代・中世史研究の再評価とその復権に意欲を燃やしている[3]。

さらに、この二つの著作集の刊行に関連して、ここでとくに言っておかなければならないことは、その翻訳者についてである。たとえば、著作集①の第一部を構成するウェーバーの『宗教社会学論集』所収の諸論文（「宗教社会学論集・序言」、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」「プロテスタン

ティズムの諸教派と資本主義の精神」「宗教的現世拒否の諸段階と諸方向の理論」）及び第二部の、いわゆる『学問論集』収録の諸論文（「社会科学および社会政策的認識の『客観性』」「文化科学の論理学の領域における批判的研究」「理解社会学における若干のカテゴリーについて」「社会学および経済学における『価値自由』の意味」「社会学の基礎概念」）、そして著作集②では「宗教社会学」及び「都市論」、これらはいずれもまた、ネウスィーヒンの教え子であったエム・イ・レーヴィナ（彼女はイニオンИНИОНに所属する翻訳の専門家）の手になるものである[4]。この二つの著作集の過半を占めるウェーバーの主要論文の翻訳は、前稿(1)でもすこし触れたように（本誌、第10巻第3号、163−164ページ）彼女が1970年代のはじめに手がけた訳業をもとにしたものである。そして、じつは、ほぼこれを前後する時期、60年代末−70年代の時期が、今日のウェーバー「新研究」（ロシアのウェーバー研究の「第三期」ということが出来る）の「醗酵」の時であったということである。このことについては、次章で別途詳しく触れることになろう[5]。

こうした翻訳事情に止目すると、ネウスィーヒンが1920年代にウェーバーの宗教社会学論集、とくに「プロテスタンティズムと資本主義の精神」の翻訳を企図した、あの遺志は[6]弟子たちの手に受け継がれ、ほぼ半世紀という長い期間を経てようやく日の目を見たということもできる。また見方を変えて言えば、ロシアのウェーバー研究はソヴェト体制下で1930年代以降約半世紀にわたって中断を余儀なくされたとはいえ、――「外部の者」の眼には必ずしも見えない形ではあったが――こうして1920年代のウェーバー研究に発する流れが、地下水脈として今日のウェーバー研究の大きなうねりにつながっている、といえるのかもしれない。

にもかかわらず、今日のロシアで見られるウェーバー研究の本流は、明らかに20年代のネウスィーヒンの研究とは切れており、まったく新たな問題関心から出発していることも、やはり確かな事実である。そのことについては、後論で詳しく触れたいと思うが、いずれにせよ、90年代前半に新たに刊行されたこ

の二つのロシア語訳の刊行が、現代ロシアの新しいウェーバー研究の発展を大いに促進した要因の一つとなったことは、いいえて誤りの無い所である。現在、ロシアで発表されているウェーバーに関する論文はすべて、参照すべきウェーバー論文のテキストとして、この二つの著作集に負うているからである。

さらに最近になって現れたウェーバーの著作の翻訳について、もう一点付け加えておかねばならない。これは、本稿(1)で「ウェーバーの著作のロシア語訳」（本誌、第10巻第３号、161－162ページ）を紹介した後になって刊行されたものであるが、1906年のウェーバー・ロシア革命論の第一論文、「ロシアにおける市民的民主主義の状態」の新訳の刊行である。クスタリョーフによって1998年に刊行された、Макс Вебер, К состоянию буржуазной демократии в России, перев. А. Кустарева:《*Россия: Опыт революций и современность*》, ИНИОН, М., 1998, с. 5-121. がそれである。これは、これより少し前に、雑誌 *Рубежи*, 1997, №5, 6, 7, 8/9, 10/11, 1998, №1にも掲載されたものである。この翻訳は、ウェーバーの膨大な原注の重要なものも収録しており、全訳に近いものとなっている。これによってロシアの読書界も、ようやくにして、ウェーバー・ロシア革命論の大凡の輪郭を実際に掴むことが出来るようになった。しかし、ロシア革命論の第二論文の方は、まだ翻訳は出ていない。

さて、90年代に入って相次いで二つのウェーバー著作集が翻訳刊行された事実と並んで、もう一つ、現代ロシアの研究状況を掴むてがかりとして、これまでロシアで刊行された、ないしはロシア人研究者の手になる、ウェーバー研究のモノグラフのリストを挙げてみることにしたい。なお、モノグラフ以外の、紀要や雑誌に掲載された多くの諸論文については、後論でロシアにおけるウェーバーへの関心の所在を整理する時に、詳しく紹介することにするので、ここではしばし、モノグラフだけに、しかもウェーバーそのものを正面から扱ったものだけに限定する。これまでのわれわれの調査では、以下のものが見出される。

①ゲ・コルフ『ウェーバーとマルクーゼの文化理論の批判』（ドイツ語からの翻訳）（Г. Корф, *Критика теорий культуры М. Вебера и Герберта Маркузе*, пер. с нем. З.В. Горловой, М., 1975.）

②ゲ・フォーチェフ『デュルケーム、パレート、ウェーバーに関する社会学理論』（Г. Фотев, *Социологические теории на Е. Дюркем, В. Парето и М. Вебер*, М., 1979.）

③ジョン・ルイス『マックス・ウェーバーの社会学諸概念に対するマルクス主義の批判』（英語からの翻訳）（Джон Льюис, *Марксистская критика социологических концепций Макса Вебера*, пер. англ. под ред. и с предисловием А.Г. Здравомыслова, М., 1981.）

④イェ・イ・オジガーノフ『ウェーバーの政治理論　批判的分析』（Е.И. Ожиганов, *Политическая теория М. Вебера, критический анализ*, Рига, 1986.）

⑤ヴェ・ペ・マカレンコ『信仰、権力、官僚制、ウェーバー社会学の批判』（В.П. Макаренко, *Вера, власть и бюрократия, критика социологии М. Вебера*, Ростов н/д. изд-во Рост. ун-та, 1988.）

⑥ペ・ペ・ガイデンコ、ユ・エヌ・ダヴィードフ『歴史と合理性――マックス・ウェーバーの社会学とウェーバー・ルネサンス』（П.П. Гайденко, Ю.Н. Давыдов, *История и рациональность, социология М. Вебера и веберовский ренессанс*, М., 1991.）

⑦ア・イ・パートルシェフ『ウェーバーの脱魔術化した世界』（А.И. Патрушев, *Расколдованный Мир М. Вебера*, М., 1992.）

⑧ペ・ペ・ガイデンコ、ユ・エヌ・ダヴィードフ『ロシアと西洋人』(Piama P. Gaidenko, Jurij N. Davydov, *Rußland und Westen, Heidelberger Max Weber-Vorlesungen 1992*, Suhrkamp 1995.)

⑨論集『マックス・ウェーバーの教訓』（1995年6月14日モスクワ市教育大学で行われたシンポジウムの記録）(*Уроки Макса Вебера*, МГПУ, М.,

1995.)

⑩エム・ヴェ・マスロフスキー『マックス・ウェーバーの官僚制論と現代政治社会学』(М.В. Масловский, *Теория бюрократии Макса Вебера и современная политическая социология*, Нижний Новгород, 1997.)

⑪ア・イ・クラフチェンコ『マックス・ウェーバーの社会学――労働と経済』(А.И. Кравченко, *Социология Макса Вебера, Труд и экономика*, М., 1997.)

⑫エヌ・エヌ・ザルービナ『経済発展の社会文化的諸要因：ウェーバーと現代的近代化論』(Н.Н. Зарубина, *Социокультурные факторы хозяйственного развития: М. Вебер и современные теории модернизации*, СПб, 1998.)

⑬ユ・エヌ・ダヴィードフ『マックス・ウェーバーと現代理論社会学――ウェーバー社会学説のアクチュアルな諸問題』(Ю.Н. Давыдов, *Макс Вебер и современная теоретическая социология, Актуальные проблемы социологического учения*, М., 1998.)(7)

ご覧の通り、ウェーバーそのものを扱ったモノグラフは、数から言えば、例えば我が国の膨大な研究書の数とは比較にならないほどわずかなものであり、その点から見てもロシアでは本格的なウェーバー研究は今やっと始まったばかりの段階だともいえそうである。

さて、上記のリストから何が見えてくるであろうか。第一に、①から⑤までのものは、刊行年次からいって、ペレストロイカ開始前の研究であって、いずれも表題に「ウェーバー批判」と銘打っているのが特徴的である。1990年頃までの旧ソ連では、こういう形でしかウェーバー研究は現れなかったし、また研究の発表も許されなかったのである。そして、これまた周知の所であるが、旧ソ連では「ブルジョア科学批判」という独特な「ディスツィプリン」が成立していて、外国語のよくできる人たちが、それぞれの分野で西欧の諸理論やまた最新の諸研究の「批判」に従事していたのであった。そして、いわば「文化的鎖国」状況にあ

った旧ソ連時代には、こうした「ブルジョア科学批判」という形を通じて、西欧の現代諸思想や諸理論がソ連社会に紹介され、人々はこれを通じてウェーバー理論を吸収していたのである。しかし、ほぼ1990年以降、「グラースノスチ」の満面開花によって、公式イデオロギーにとらわれない自由な研究への道が切り開かれるようになり、とくにソ連共産党の崩壊後、検閲制度が基本的に廃止されてからは一転して、ウェーバー研究でも、文字どおり堰を切ったように、ウェーバーに好意的な姿勢を示す諸論文が続々と発表されるようになる。⑥以下の著作は、さしあたり言うならば、こうした「ウェーバー解禁」の所産を示すものでもある。

「ウェーバー解禁」以前と以後とでは、「ウェーバー批判」からウェーバー理論の「肯定的な受容」へと、ウェーバー研究の傾向にも大きな転換が見られることは確かなことであるが、しかし、その場合でも、上記のような旧ソ連時代の特殊な学問事情からいって、われわれがとくに心得ておかなければならないことがあるように思う。その点について、すこしく触れておきたい。これは上記のモノグラフのみならず、その他以下に紹介する諸論文を読んでみるとわかることであるが、もとより、ソ連解体以降出版されたものがすべてロシアのウェーバー「新研究」といえるかどうかは別のことがらであり、また逆に、それ以前に刊行された著作ないし、ここに挙げてはいない雑誌論文でも、たとえ「ブルジョア科学批判」あるいは「ウェーバー批判」と銘打っていたとしても、その中には、今日につながる「新しい」内容の研究がはらまれている場合もないとはいえないということである（ではいったい「新しい内容」とは何であるか、これがすぐに問題になるであろうが、これは本章のテーマそのものに関わるから、行論の中で明らかにすることとして、この点はいましばらく措いたまま、議論を進めることにする）。ここでの問題はとくにペレストロイカ以前の研究についてである。

すでにペレストロイカが始まる相当以前の時期から（正確にいつの時点からかと問われても、確かなことを言うことは出来ないが）、アカデミックな世界に身を置く真摯な学者やインテリゲンツィアの中には、明白な「異論派」でな

くとも、「公式イデオロギー」に対して――各人において程度の差はあれ――すでに一定の距離をおいていた人々も少なくはなかったことは、それはそれとして知られた事実であろう。そして、そういう人たちのなかには、「骨化した」公式イデオロギーに抗しつつ、「ブルジョア科学批判」という衣を着けながら、西欧の諸思想の批判的な「受容」に努めた人も少なからずいたのである。そして、そうした人々の仕事を通じて、それこそ「主体的な」研究（祖国の問題を自己の研究の基点にしっかりと据えたうえで、同時に現代世界にも共通する問題に眼をやりながら、その中でみずからの研究課題にアプローチするという意味での）が深められていったことも、われわれは見逃してはなるまい。われわれはいまでこそ、旧ソ連時代の学者が書いた「結論」的な叙述をもって、直ちに彼らの本心から出た研究のパースペクティヴだと判断してはならないことをよく承知しているけれども、しかしながら、厳しい検閲の圧力のもと、公式イデオロギーの「鎧」をかぶって仕事を進めなければならなかった（そうでなければ、研究機関から放逐されるか、そうでなくとも当該研究を続けることは出来なかったからである）こうした「主体的な」学者の仕事を、しっかりと見分けることが出来なかったことも確かなことである。われわれは「ブルジョア科学批判」と言うだけで、もう既にそれを真剣に読まないこともしばしばだったからである。

しかし、ことはそれだけで終わらない。というのは、主体的な学者であれば、彼（あるいは彼女）にとって、「現代ブルジョア的諸理論」への「批判」というのは、ソヴェトの世論に西欧の現代理論を紹介するための戦術であっただけでなく、――すでに公式イデオロギーとは異なる――彼の「本心」からでた文字どおりの「批判」であったこともありうるからである。われわれは後論において、そうしたロシアの主体的なウェーバー研究者の一人、ユーリー・ダヴィードフのウェーバーへの接近の歩みを（それは「苦難」の道筋であったが）詳しく紹介しようと思うが、その彼が回顧していうには、「ウェーバー解禁」の20年以上も前、ブレジネフ時代の1960年代末から70年代の半ばに、彼自身は

すでに「公式イデオロギー」を拒否して、西欧（彼の場合は主としてドイツ語圏の）哲学や現代諸理論への「批判」を通じてウェーバー理論の吸収に努めていたが、しかし、彼の西欧諸理論への「内在的批判」は、事情を知らない外国人にはもとより、「イソップの言葉」の意味に通じていたロシア人観察者（ソヴェト・インテリゲンツィア）にとってさえ、それとして識別することは難しいことであった、という[8]。公式イデオロギーの圧力のもとでおこなわれた、紹介のための「批判」なのか、あるいは紹介と同時に筆者の本心からの「批判」なのかを、「イソップの言葉」をよく知っていた読者ですら識別することが難しかったと言うダヴィードフの発言から、われわれは当時ソヴェト・インテリゲンツィアが置かれたきわめて複雑な状況に想いを到さないわけにはいかない。

こうしたダヴィードフの眼からすれば、これまでの旧ソ連時代のウェーバー研究史に関する西側の研究には、一つの大きな欠陥があるということにもなる。ペレストロイカが開始される以前の段階で、西側の研究者が旧ソ連時代のウェーバー研究の状況を知る事が出来た数少ない研究の一つに、ヨハネス・ワイスの著作、 Johannes Weiß, *Das Werk Max Webers in der marxistischen Rezeption und Kritik,* Westdeutcher Verlag, 1981.（本書の要約が Johannes Weiß, On the Marxist Reception and Critique of Max Weber in Eastern Europe, ed. by R. J. Antonino and R. M. Glassman, *A Weber-Marx Dialogue,* Univ. Press of Kanzas, 1985, pp.117-131 にある）があるが、本書自体は、旧社会主義圏のウェーバー研究を紹介した先駆的な研究であるだけではなく、調査の行きとどいたそれなりに優れた研究であって、本稿の筆者もこの研究を始める段階で大いに参考にさせてもらった著作である。しかしながら、このワイスの研究に対して、ダヴィードフは、それ自体としてはやんわりとした表現を取りながらも、しかしその実極めて手厳しい内容の批判を寄せている。ダヴィードフの言い方によれば、ワイスの研究は、当時のソヴェト・インテリゲンツィアのおかれたいわば「お家の事情」(Familiengeheimnisse)[9] を十分理解していない、というのである。ワイスの眼は、旧ソ連学界の「エスタブリッシュメント」の

諸研究にのみ限定されており、それとは異質な、いわば「非公式的な」ウェーバー研究の胎動が――一般の読者公衆の眼に触れることは少なかったが――、60年代末－70年代の厳しい状況の中にも始まっていたこと、このことに正当に眼をむけていない、というのがダヴィードフの批判するところであった。

われわれはいま、ロシアのウェーバー研究の第一人者が回顧する当時のソヴェト・インテリゲンツィアの置かれた複雑な状況、あるいは彼らの――時として公式的イデオロギーとの混濁も無かったとはいえないであろう――複雑な心性を十全に理解していると安易に言うべきではないであろうが、それでも、ダヴィードフの述懐をそれとして受け止めるならば、われわれもかれらの内面の理解に多少なりとも近づけないわけではない(10)。とくにウェーバーの場合は、20年代末に「ブルジョア史学」攻撃の目玉とされた事情もあり、一般に旧ソ連時代にはウェーバー研究が直ちに「イデオロギー問題」と直結させられる可能性が高かっただけに、この問題では「部外者」でしかないわれわれは、少なくともそうした彼らの屈折した心性をとくと理解した上で、研究史の問題に取り組まなくてはならないと思うのである(11)。以上のように考えてくるならば、今日見られるロシアにおけるウェーバー研究の高まり、「ロシアのウェーバー・ルネサンス」と呼ばれる現象も、単純にペレストロイカと自由化の結果であるといって済ますわけにはいかないのである。

さて、上記のモノグラフのリストに戻ると、第二に、すぐわれわれの目に飛び込んでくるのは、今触れたユーリー・ニコラーエヴィチ・ダヴィードフの名前である（上記のリストの⑥、⑧、⑬を参照）。彼は、ここに挙げた1991年以降に出版された３冊のモノグラフのほかにも、以下に見るように、それ以前の時期からウェーバーについて数多くの論文を執筆しており、今日の「ロシアのウェーバー・ルネサンス」の本流に位置する中心人物である。彼の上記の三つの著作を読んでみると分かることであるが、ウェーバー理解の深みという点で、彼の研究は群を抜いているものがある。そればかりか（これは彼自身の研究歴によって規定されている面もあるが）、西欧のウェーバー研究にも通暁してい

ることが、彼の研究の大きな強みとなっていることも指摘しておくべきだろう（さしあたり⑥はそれを示すものである）。そして、彼はこうした西欧の諸研究にも学びながら（同時に「内在的な」批判を通して）、また独自の視角から、ウェーバー社会学を20世紀西欧の理論社会学史の中に位置づける大きな著作を、最近になって完成させた。⑬の著作がそれであるが、これは、現代西欧のウェーバー研究にも決して引けを取らない高い水準の研究であるように思う。それともう一つ、彼のウェーバー研究を大きく特徴づけているのは、何といっても、ロシアの歴史と現代のテーマに密着した問題からウェーバーの社会学理論にアプローチするという一貫した研究態度にある。そうした意味での、きわめて主体的な研究態度が、彼の作品に文字どおり「ロシアに固有なウェーバー研究」という刻印を押す結果ともなっているのである。したがって、彼のウェーバー研究のテーマは（少なくともその大きな一つは）、本稿のテーマでもある「ウェーバーとロシア」にぴたりと一致してくるわけである（⑧はこのテーマを直接扱ったものである）[12]。ダヴィードフのウェーバー研究に見られる以上の特徴点を踏まえて、あらかじめわれわれの評価をあたえるとすれば、彼の研究は、国際的レベルでも通用する、その意味で普遍的なウェーバー論であるとともに、ロシアの問題に密着した、その意味でロシアに土着的なウェーバー研究でもある、といって差し支えないように思う[13]。

したがって、現代ロシアのウェーバー研究の動向を考察することを課題とする本稿では、何よりもまず、ユーリー・ダヴィードフのウェーバー研究を中心に取り上げなくてはならないということになる。しかしながら、彼の研究については詳しく検討する必要があるので、章を改めて論ずることにして、その前に、彼の研究以外にもどんなものがあるのか、上記のモノグラフのほかに雑誌論文をも含め、まずは現代ロシアのウェーバー研究の全体を概観しておくことにしたい。

（２）ロシアにおける「ウェーバー・ルネサンス」の現状――ウェーバー研究の概観

さて、現代ロシアのウェーバー研究の動向を問題にする限り、以下に見るように、ゴルバチョフによるペレストロイカが開始されるほぼ1986年頃を起点として、数多くの論文がわれわれの眼に留まるようになった。これはやはり確かな事実である。したがって、ペレストロイカの開始をもって、ロシアのウェーバー研究は明らかに新段階を向かえたわけで、われわれが、現代ロシアのウェーバー研究という場合、ペレストロイカ開始以前と以後とを大きく区別して、大枠として後者の時期のものを指すということは許されるであろう。そこで、ペレストロイカ開始以降のウェーバー関連の諸論文を全体として見渡してみると、ほぼ６点ほどのジャンルに分けることが出来るように思う。以下では、われわれが目にし得た限りの文献を挙げて、現代ロシアでウェーバーへの関心がどんな所にあるか、あらかじめ、おおよその全体像を読者に紹介しておこうと思う。なお、繰返していうけれども、ほぼすべてのジャンルに顔を出すダヴィードフのウェーバー論についてはまとめて後述するので、ここでは、彼の研究以外に重要だと思われるものについてのみ、その都度若干のコメントを付すことで、現代ロシアのウェーバー研究の概観としたい。

１）まず第一に、西欧で1970年代の半ばころに大いに高まったウェーバー新研究、いわゆる西欧社会学における「ウェーバー・ルネサンス」の状況を紹介した一連の研究がある。一般的に言えば、今日ロシアで見られるウェーバー研究の一定の隆盛も、ペレストロイカの開始によって、これまで禁止されていた諸々の西欧思想が一挙にロシア社会に流入した、あの一連の現象のなかの一つであることは、やはり否定することは出来ないからである。ウェーバー研究を加速化させたのは間違いなく、これである。われわれが目にし得た限りでは、このジャンルに属する文献には下記のものがある。

①ユ・エヌ・ダヴィードフ「ウェーバー・ルネサンス」（Ю.Н. Давыдов, Веберовский ренессанс, *Социологические исследования*, 1986, №.3.）

②同「<ウェーバー・ルネサンス>とウェーバーの<研究プログラム>問題」（Он же, 《Веберовский ренессанс》и проблема 〈исследовательской программы〉 М. Вебера, в кн. *Буржуазная социология на исходе XX века; критика новейших тенденций*, М., 1986, с.91-121.）

③同「西ドイツにおけるウェーバー全集の最初の数巻の刊行について」（Он же, О выходе первых томов полного собрания сочинений Макса Вебера в ФРГ, *Социологические исследования*, 1990, №.4.）

④ペ・ペ・ガイデンコ、ユ・エヌ・ダヴィードフ『歴史と合理性』第2章及び第3章（П.П. Гайденко, Ю.Н. Давыдов, *История и рациональность; социология М. Вебера и веберовский ренессанс*, разд. 2, 3, М., 1991）

⑤ユ・エヌ・ダヴィードフ「古い手紙を読む効用について（1906－1908年のウェーバーの遺された書簡）」（Он же, О пользе чтения старых писем (эпистолярное наследие М. Вебера за 1906-1908 гг.), *Социологический журнал*, 1995, №.1.）

⑥同「国民経済学から文化社会学へ（1906－1908年のウェーバーの手紙における社会学理論の諸問題）」（Он же, От национальной экономики к культур-социологии (Проблемы социологической теории в письмах М. Вебера 1906-1908 гг.), *Вопросы философии*, 1996, №.1.）

⑦ヴォルフガンク・モムゼン「ウェーバーと歴史学」（翻訳者、ア・イ・パートルシェフ）（В. Моммзен, Макс Вебер и историческая наука, (перев. А.И. Патрушева), *Новая и новейшая история*, 1990, №.4.）

⑧ア・イ・パートルシェフ『ウェーバーの脱魔術化した世界』（А.И. Патрушев, *Расколдованный Мир М. Вебера*, М., 1992.）

⑨同「ウェーバー・ルネサンス：起源、論争及び諸傾向」（Он же, Ренес-

санс Макса Вебера: истоки, дискуссии и тенденции, *Новая и новейшая история*, 1993, №1.)

たしかに、ペレストロイカの開始を画期にしたロシアのウェーバー研究の高まりは、それ自体としては、ロシアの学問事情の大きな地殻変動を示す現象の中の一つであるにすぎないとは言え、しかし、それが、本国ドイツでウェーバー全集が刊行されはじめた時期とほぼ時を同じくしたという事実は、ロシアのウェーバー研究の高まりにとっては、特別に重要な意味をもっていたといわなくてはならない。周知のように、1984年から始まったドイツ語版のウェーバー全集の刊行によって、国際的なウェーバー研究の水準も新しい段階に入ったということが出来るであろうが、一方細々とした動きながら水面下で始まっていたロシアのウェーバー新研究の動きが、ペレストロイカの開始とともに大きな流れとなって表面化すると同時に、国際的なウェーバー新研究の波に直ちに洗われる結果となったからである。上記リストに見られるように、1986年から、主としてダヴィードフによって、西欧の「ウェーバー・ルネサンス」の紹介が行われた。そうした研究をまとめたものが④の著作であるが、これは西欧のウェーバー研究に対する、微に入り細に入るきわめて「内在的な」批判的分析である（その内容は後述）。また、彼の場合、西欧の最新のウェーバー研究の中で、ウェーバー作品史における「研究プラン問題」が中心問題の一つになっていることにも正当に目が向けられていることが分かるであろう（上記②の論文）。そしてさらに、彼はウェーバー全集の中の刊行されたばかりの書簡集にも、早くも分析のメスを入れていることが注目される（⑤、⑥の文献）。しかしながらこうした西欧の新研究の紹介も、まだまだほんの一握りの人たちの研究にとどまっていることも事実である。これは、旧ソ連時代とは大きく事情が変わって、80年代末以降、西欧の学術書の多くが、ロシアの図書館にぱったりと入らなくなった事情も大きく作用しているものと思われる。驚くべきことに、ウェーバーのドイツ語版全集が、モスクワのどの図書館にも一冊も入っていないというのが現状なのである[14]。

2）第二に、なんといってもこれがロシアの「ウェーバー・ルネサンス」と称される今日のウェーバー研究の中心をなすテーマといってよいが、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に関連した諸研究が、すなわち「労働倫理」と「資本主義のエートス」論に関連した一連の諸論文が続々と発表されている。また最近では、これと不可分の関係にあるウェーバーの「資本主義類型論」を扱った一連の研究が目立つようになった。このジャンルに属するウェーバー研究が、資本主義への転換を遂げたばかりのロシアにとって、まさしくアクチュアルなテーマとなっていることは疑い得ない。そして現代ロシアで一般的にウェーバーへの関心が高まったのも、何よりもまずこの分野の問題であるといってよい。もちろん文献の数からいっても、このジャンルのものが一番多いのも当然と言えば当然であるが、ここでは主な論文としては以下のものがある。

⑩ヴェ・アリダウディ「社会学における資本主義確立の主観的前提」（В. Альдауди, Субъективные предпосылки становления капитализма в социологии, *Вестник МГУ, сир. 6*, 1990, вып. 3, №20.）

⑪円卓会議資料「祖国の文化問題としての勤労倫理；現代的側面」、とくに、ユ・エヌ・ダヴィードフ「全体主義と勤労倫理の諸問題」『哲学の諸問題』1992年第1号。（Трудовая этика как проблема отечественной культуры; современные аспекты (материалы “круглого стола”), Ю.Н. Давыдов, Тоталитаризм и проблемы трудовой этики, *Вопросы философии*, 1992, №1.）

⑫円卓会議資料「経済行為の民族的、宗教的特質」。とくにゲオルギー・グラヴェーリ「ロシアの文明化経験。精緻化の必要性」『経済の諸問題』1993年第2号。（Национальные и религиозные особенности экономического поведения, Г. Гровели, Цивилизационный опыт России; необходимость уточнения, *Вопросы экономики*, 1993, №2.）

⑬ユ・エヌ・ダヴィードフ「ホモ・エコノミクス、君は何者か？」（Ю.Н. Давыдов, Кто ты, гомо экономикус? *Наука и жизнь*, 1990, №11.）

⑭同「ホモ・エコノミクス」(Он же, Homo oekonomicus, *Диалог*, 1990, №14.)

⑮同「ウェーバーの資本主義の社会学」(Он же, Веберовская социология капитализма, *Социологические исследования*, 1994, №8-9, №10.)

⑯同「コンドラチェフの歴史発展理解に照らした『新ロシア人的』資本主義（第３回コンドラチェフ・国際シンポジウムのための討議資料)」(Он же, "Новый русский" капитализм в свете Кондратьевского понимания эволюции, (Материалы к обсуждению на III Международной кондратьевской конференции), М., 1998.)

⑰同『理論社会学史』第２巻、第３部第４章「マックス・ウェーバー；文化科学の体系における社会学」、第５章「ウェーバーの資本主義論――普遍史的社会学への鍵」(*История теоретической социологии, Т. 2*, М., 1998. Ю.Н. Давыдов, раздел 3 глава 4, М. Вебер; социология в системе наук о культуре, р. 3 гл. 5, Веберовская теория капитализма—ключ уинверсальной исторической социологии.)

⑱エル・デ・フナーゴフ「組織構造の合理性の諸問題」(Р.Д. Хунагов, Проблема рациональности организационных структур, *Социологические исследования*, 1995, №7.)

⑲ア・イ・クラフチェンコ「ウェーバーの資本主義概念と勤労のモティベーション」(А.И. Кравченко, Концепция капитализма М. Вебера и трудовая мотивация, *Социологические исследования*, 1997, №4.)

⑳ア・イ・クラフチェンコ『マックス・ウェーバーの社会学――労働と経済』(А.И. Кравченко, *Социология Макса Вебера, Труд и экономика*, М., 1997.)

㉑エヌ・エヌ・ザルービナ「近代化と経済文化（ウェーバーの概念と現代の発展理論)」(Н.Н. Зарубина, Модернизация и хозяйственная культура (концепция М. Вебера и современные теории развития), *Социологичес-*

кие исследования, 1997, №4.）

㉒同『経済発展の社会文化的諸要因：ウェーバーと現代的近代化論』（Она же, *Социокультурные факторы хозяйственного развития: М. Вебер и современные теории модернизации*, СПб, 1998.）

すでにペレストロイカ期から、国民の労働倫理の欠如という問題が社会主義ソ連における「負の遺産」の一つとして指摘されてきたが、「歴史的選択」を遂げ再資本主義化の道を進む今日のロシアにおいて、国民の「勤労倫理」、ならびに「企業家精神」の欠如という問題は、経済学のみならず哲学、社会学、あるいは歴史学の各方面からも、分野を越えて広く関心を集めている。上記リストに見られるように、『哲学の諸問題』や『経済の諸問題』といったロシアの代表的な学術雑誌で、近代化ないし資本主義化に伴う精神基盤や文化史的問題について、しばしば特集が組まれているのに気がつくはずである（⑪、⑫の資料）。ウェーバーへの関心の多くが、一般的にいっても、何よりもまず、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の著者としてのウェーバーに向けられているという事情は、決して不思議なことではない。しかも、ロシアが「歴史的選択」を行った1992年以降は、とくにこの問題は一層アクチュアルな問題としてロシア社会の前に提起されてきたといえよう。というのは、1992年１月以来、ＩＭＦと協調して、「価格自由化」によるショック療法から始まる、いわゆるガイダール路線によるロシアの市場経済化、再資本主義化が、その主観的意図に反して、現実には、西欧流の現代的な資本主義、すなわち近代的な合理的な生産を基礎とした資本主義をもたらさず、ときに「バンディット資本主義」（強盗資本主義）とか「マフィア資本主義」とか呼ばれるような資本主義のタイプをうみだしてきたからに他ならないからである。今日のロシアでは、一方で、旧来の国有財産を――「民営化」の名のもとで――驚くべき安価で手に入れた民間銀行＝金融資本と、また輸入業務を中心とする商業資本のみが栄え、他方、肝腎の国内生産がいわば「瓦解」状況にあることは、しばし

ば指摘される所であるが、こうしたロシアの資本主義化の現状に対して批判的な態度を持つ人たちの間で（そして今では、そうした考えを持つインテリゲンツィアは多数派になりつつあるように見える）、一方では、市場に対する一定の国家規制措置を強化する必要性が語られるとともに、（そして、旧来の社会主義体制への復帰がもはやありえないこととして、これを拒否する限り）他方では、単に経済自由化と市場経済化一本槍の政策的措置だけをもってしては、現代の西欧的タイプの――と、多くのロシア人は考えている――市民的な「近代資本主義」の制度を作り出すことはできないのではないかという認識が広がってきたのは、当然の成り行きであった[15]。こうした所から、西欧近代の資本主義形成の精神的な前提の問題を問うたウェーバーのエートス論にますます多くの人々の注目が集ってきたことも、十分理解できる事柄だといってよい[16]。

さらに、エートス論と密接に関連する形で、ウェーバーが近代的な「合理的資本主義」と「冒険的資本主義」あるいは「略奪的」ないし「賤民的」資本主義とを対置したかの資本主義の「類型」論が――我が国では大塚久雄の研究以来、ウェーバー論としては馴染み深いものとなっているが――ロシアでは事あらためて、いまアクチュアルな問題として論じられている（⑮、⑯、⑰）。これも、従来ロシアの社会科学に一般に見られた一元的な資本主義観に照らしてみれば、ウェーバー研究がロシアの社会科学にもたらした、一つの新たな成果であるということも出来よう。

とはいえ、今日20世紀末のロシアの再資本主義化は、ウェーバーの「プロテスタンティズムと資本主義の精神」が発表された時から見れば一世紀近く、またその作品の対象になった時代からすれば、四世紀近くもへだった時代のことであり、他方、大衆的な宗教倫理の基盤からいっても、ロシアでは西欧流のプロテスタンティズムに依拠できるはずも無い。したがって、そこからまたウェーバー理論の着想を借りて、ロシアに固有な、あるいはロシアに伝統的な精神的な土壌、例えばロシア正教の宗教倫理の中に、「西欧的な」――と考えられた――近代的な勤労倫理と企業家精神とを育む手がかりを求めようとする文化論的ある

いは文化史的な理論志向を生み出すことにもなる。上記リストでは、さしあたりザルービナの著作(文献、㉑、㉒)がそうした試みを示す一例である[17]。

だが、今日見られるこうしたウェーバーの「プロ倫」への関心は、もとよりロシアにおいて初めての現象ではない。この問題はまた、今日とは世界史的段階を大きく異にするとはいえ、今世紀（20世紀）初頭、とくに1905年の民主主義革命が破綻した直後の、ロシアの自由主義派のなかの一部の人々が直面した課題と基本的には同じ問題であることを想起しよう。われわれは、すでに前稿でかの「道標」派の一人、セルゲイ・ブルガーコフが1908－1909年の時点で、ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（原論文の刊行は1904－1905年）に早くも着目して、その問題提起を受けて、西欧プロテスタンティズムの宗教倫理に対応する禁欲的な倫理と近代的な勤労倫理を、ロシアの精神的土壌たるロシア正教の宗教倫理の中に探ろうと試みたことを紹介した（本稿(1)の４「セルゲイ・ブルガーコフとウェーバー」、本誌第10巻第３号参照)。そしてまた、この20世紀の末になって、とくにゴルバチョフ時代の末期からエリツィンによる体制転換の開始にかけての時期に、ロシアの世論のなかで、当のブルガーコフを含むかの『道標』の人々の思想（ベルヂャーエフ、ストルーヴェ、フランク、キスチャコーフスキーなど、彼らはみな1905年の革命期には市民的民主主義者として登場した）が大きなブームになった事実も知っている。その多くは、社会主義イデオロギー崩壊後の、ロシアのアイデンティティの喪失状況を反映して、一種のロシア回帰、ロシアのナショナルな思想の復興を試みる大きな動きのなかの現象であったが、しかしまた、論集『道標』(1909年）が登場した1905年革命後の状況は、ロシアのリベラルの間で、19世紀以来のロシアの近代化と資本主義化のあり方への深い反省が行われた時期でもあって、その点では今日とよく似た事情にあったからでもある。この点についても、ユーリー・ダヴィードフがしっかりとおさえている（後述)。したがって、現代ロシアのウェーバー研究が、次に見るように、19世紀末から20世紀初めの10年代にかけて登場したロシアの諸思想、ロシアの自由主義派、民主主義派の思想や、とくに「道標」派

の思想に特別な関心を寄せてきたのも、十分な根拠があるわけである。

３）かくして、ロシア思想史とロシア・インテリゲンツィアに関わる一連の研究、とりわけ19世紀末から20世紀初頭におけるロシアの自由主義派の思想史研究が、ウェーバー研究の第３のジャンルとして登場する。ウェーバー研究と交わる形でのロシア思想史の研究には以下のものが見出される。（繰返していうが、ここではウェーバー研究という観点から見た場合のロシア思想史、インテリゲンツィア論に限定している。念のため。）

㉓ユーリー・ダヴィードフ「『道標』の苦い真実（ロシア・インテリゲンツィアの自己認識の悲劇的体験）」（Ю.Н. Давыдов, Горькие истины《Вех》(Трагийческий опыт самопознания российской интеллигенции, *Социологические исследования*, 1990, №10.）

㉔同「ロシアの二つの深淵と二つの顔」（Он же, Две бездны и два лица России, *Вопросы философии*, 1991, №8.）〔これは論集『深き淵より』（1918年）に収録されたブルガーコフ論文「神々の饗宴にて」の分析。〕

㉕同「ロシア・インテリゲンツィア論への二つのアプローチ；ウェーバーと『道標』」（Он же, Два подхода к пониманию российской интеллигенции; М. Вебер и《вехи》, *Свободная мысль*, 1991, №18, 1992, №1.）

㉖同「ウェーバーとレーニン。どちらが正しいか？」（Он же, Вебер и Ленин, кто прав?, *Диалог*, 1991, №15.）

㉗同「マックス・ウェーバーとロシア」（Он же, Макс Вебер и Россия, *Социологические исследования*, 1992, №3.）

㉘同「ウェーバーとブルガーコフ（キリスト教の禁欲と勤労倫理）」（Он же, Вебер и Булгаков (христианская аскеза и трудовая этика), *Вопросы философии*, 1994, №2.）

㉙同「ウェーバーとトルストイ」（Он же, Макс Вебер и Лев Толстой, *Вопросы литературы*, 1994, вып. 1.）

㉚ペ・ペ・ガイデンコ、ユ・エヌ・ダヴィードフ『ロシアと西欧人』Piama P. Gaidenko, Jurij N. Davydov, *Rußland und Westen, Heidelberger Max Weber-Vorlesungen 1992,* Suhrkamp, 1995.

㉛ユ・エヌ・ダヴィドフ「マックス・ウェーバーとミハイル・バフチン」（Ю.Н. Давыдов, Макс Вебер и Михаил Бахтин, *Социологические исследования*, 1996, №10.）

㉜同『理論社会学史』第２巻、第２部、第１章「セルゲイ・ブルガーコフのポスト・マルクス主義の社会哲学」、第２章「ピョートル・ストルーヴェのポスト・マルクス主義の哲学的－社会学的探求」*История теоретической социологии, Т. 2*, М., 1998, раздел 2 глава 1, Ю.Н. Давыдов, Постмарксистская философия С.Н. Булгакова, р. 2 гл. 2, Постмарксистские философско-социологические искания П.Б. Струве.

㉝同「ウェーバーとキスチャコーフスキー；ミクロ分析の実験」（Ю.Н. Давыдов, Вебер и Кистяковский, Опыт микроанализа, в кн. *Б.А. Кистяковский, Философия и социология права*, издание подготовили Ю.Н. Давыдов и В.В. Сапов, Санкт-Петербург, 1998.）〔本書は1916年にモスクワで刊行された本の復刻である。〕

㉞エディト・ハンケ「ウェーバーとトルストイ」（Эдит Ханке, Макс Вебер и Лев Толстой, в кн. отв. ред. А.О. Боронова и В.В. Козловского, *Российская социология; историко-социологические очерки*, М., 1997, С.86-108.）

ご覧の通り、この分野ではダヴィードフの独壇場という感がある。なかでも、先の第二のジャンル、ウェーバーのエートス論への関心とも直接結びついたダヴィードフのブルガーコフ論（㉘の論文）はもっとも注目に値する論文である。彼の他の論文は、その大部分が先に挙げたガイデンコとのドイツ語の共著『ロシアと西欧人』に収録されたが、また最近の彼の大著『マックス・ウェーバー

と現代理論社会学』でも、一部この線上にそって展開した議論が見られる。彼のこの分野の研究は、われわれのテーマに直接関連しており、大変興味深いものであるが、これについては後で詳しく検討する予定であるから、ここでは彼のこれまでの研究文献を挙げるにとどめておきたい。

さらにもう一人、ダヴィードフと密接に協力しながら研究を進めているヴェ・ヴェ・サポフB.B. Сапов（ロシア科学アカデミー社会学研究所）の研究にも注目しておく必要がある。彼は専門的なウェーバー研究者ということは出来ないけれども、19世紀末から20世紀初頭のロシア社会学の歴史研究を進めている理論社会学者である。彼自身のニコライ・ベルヂャーエフやセルゲイ・ブルガーコフに関する研究もいくつかあるが、今日ダヴィードフと共同して、上のリストに挙げた（㉝の文献）キスチャコーフスキーの著作『法の哲学と社会学』(1916年）やW・ゾムバルトの『ブルジョア』(1913年）のロシア語訳の復刻編集に従事し、さらに彼単独では、セルゲイ・ブルガーコフの『マルクス主義からイデアリズムへ』(1903年)、『経済哲学』(1912年)、『二つの国』(1911年）などの復刻編集の仕事を精力的に進めており、それぞれの著作に詳細なコンメンタールを付す仕事を担当している[18]。さらに、ウェーバー研究に関連する彼の重要な仕事として、ウェーバーと直接間接の交流があった新カント派のロシア人社会学者、哲学者及び法学者たち、たとえばフョードル・ステプーン（Федор А. Степун, 1884-1965)、セルゲイ・ゲッセン（Сергей И. Гессен, 1887-1950)、ミハイル・ゲルシェンゾン（Михаил О. Гершензон, 1869-1925)、ボリス・ヤコヴェンコ（Борис В. Яковенко, 1884-1949）並びにキスチャコーフスキー（Богдан А. Кистяковский, 1868-1920）といった人々に関する個人アルヒーフ資料を調査した研究がある。これに関わる彼の論文には、以下のものがある。

①B.B. Сапов, Архив Б.А. Кистяковского, *Вопросы социологии*, 1992, Т. 1, №1, с.157-164.

②Он же, Главная книга академика Б.А. Кистяковского, *Вестник Российской Академии Наук*, 1994, Т.64, №3, с.248-252.

③Он же, Письмо Б.А. Кистяковского к М.О. Гершензону (1907-1909), *Социологический журнал*, 1994, №3, с.117-137.

④Он же, Журнал 《Логос》—прерванный на полуслове диалог, *Вестник Российской Академии Наук*, 1993, Т.63, №3, с.267-279.

⑤Он же, Сергей Гессен—русский философ, *ВРАН*, 1993, Т.63, №6, с. 523-535.

⑥Он же, Профессор вышеславцев—Рахманинов русской философии, *ВРАН* 1994, Т.64, №2, с.155-171.

⑦Он же, Рыцарь философии, штрихи к портрету Б.В. Яковенко, *ВРАН*, 1994, Т.64, №8, с.753-760.

そのなかでも、例えばキスチャコーフスキーのアルヒーフから、ウェーバーがキスチャコーフスキーに宛てたいくつかの書簡を新たに発見したのは、サポフの手柄というべきであろう。①の論文がそれであるが、なおここには、さらにエミール・ラスクとゲオルク・イェリネクのキスチャコーフスキー宛ての手紙も紹介されていることを付け加えておこう。サポフのこうした一連のアルヒーフ研究を支える問題関心は、19世紀末から20世紀初頭に現れたロシア社会学の成立と発展の歴史を発掘し、この歴史像を再構成しようというところにあると思われるが、彼の綿密な研究からは、ロシアの自由主義的な社会学や法学が当時のドイツにおける新カント派哲学者やウェーバー、イェリネクから大きな影響をうけたことが推測される。今後は、こうした研究の積み重ねの上に20世紀初頭のロシア社会学思想の独自性もまた明らかになるものと期待される。

4）次に、ペレストロイカの進発とともに、政治的「民主化」がロシアの差し迫った課題となり、何よりも「法治国家」の建設がスローガンとされてきたという事情から、政治学ないし政治史研究の分野においても、新たなウェーバー研究が登場してきたことを指摘しておかねばならない。この分野の研究において、新たな角度からのロシアの立憲主義及びロシア自由主義の歴史研究の展開と結びついて、とりわけウェーバーのロシア革命論が新たに紹介され、注目

を浴びることになったことは、現代ロシアのウェーバー研究の動向を見る上でも、一つの重要な事実である。

㉟アレクサンドル・クスタリョーフ「ロシア革命の始まり、マックス・ウェーバーの異説」(Александр Кустарев, Начало русской революции, Версия Макса Вебера, *Вопросы философии*, 1990, №.８.)

㊱同「ウェーバーとロシア、鞭打ちとまじない祈祷師の国における織工〔weber〕の物語」(Он же, Вебер и Россия, или приключения ткача в стране бичей и знахарей, *Рубежи*, 1997, №.５.)

㊲エヌ・エス・プロトニコフ、エム・ア・コレロフ「マックス・ウェーバーと書簡を交換したロシア人」(Н.С. Плотников и М.А. Колеров, Макс Вебер и его русские корреспонденты, *Вопросы истории*, 1994, №.２.)

㊳エル・ペ・シパーコヴァ「マックス・ウェーバーの眼から見たロシアの改革」(Р.П. Шпакова, Российское реформаторство глазами Макса Вебера, *Политические исследования*, 1995, №.２.)

㊴ア・エヌ・メドゥシェーフスキー「エム・ヤ・オストロゴールスキーと20世紀の政治社会学」(А.Н. Медушевский, М.Я. Острогорский и политическая социология в XX веке, *Социологические исследования*, 1992, №.８, 1993, №.１.)

㊵同「近現代における民主主義と専制政治」(Он же, Демократия и тирания в новое и новейшее время, *Вопросы философии*, 1993, №10.)

㊶同「マックス・ウェーバーとロシアの立憲主義」(Он же, Макс Вебер и российский конституционализм, *Отечественная история*, 1993, №.２.)

㊷同「外見的立憲主義とは何か？」(Он же, Что такое мнимый конституционализм? *Социологические исследования*, 1994, №.２.)

㊸同「世界的な文化現象としての外見的立憲制」(Он же, Мнимый конституционализм как явление мировой политической культуры, *Социологические*

исследования, 1994, №5.)

㊹同「ロシアの諸憲法構想とその西欧的源泉」(Он же, Конституционные проекты в России и их западные источники, *Мир России*, Т.5, 1996, №1.)

㊺同「ロシア自由主義の憲法草案とその政治戦略」(Он же, Конституционные проекты русского либерализма и его политическая стратегия, *Вопросы истории*, 1996, №9.)

㊻同「市民社会の形成；ロシアにおける改革と反改革」(Он же, Формирование гражданского общества; реформы и контрреформы в России, *Сб. ст.*, *Реформы и реформаторы в истории России*, М., 1996.)

㊼同「現代民主主義の諸問題」(Он же, Проблемы современной демократии, вступительная статья в кн.; М.Я. Острогорский, *Демократия и политические партии*, отв. ред. А.Н. Медушевского, РОССПЭН, М., 1997.)

㊽同『民主主義と権威主義；比較視座から見たロシア立憲主義』(Он же, *Демократия и авторитаризт; российский конституционализм в сравнительной перспективе*, М., 1998.)

ここでは、ペレストロイカの開始とともに、ウェーバーのロシア革命論をはじめて紹介したクスタリョーフと新進の比較政治史の研究者メドゥシェーフスキーによるロシア立憲主義の新研究が重要である。

クスタリョーフは、1980年代初めに西欧に亡命した人物で、パリで発行されていた在外ロシア語雑誌『シンタクシス』に、すでにウェーバーのロシア論の短い部分訳を発表していた事実をわれわれは知っている[19]。その後ペレストロイカの開始とともに、彼は祖国の雑誌にも投稿するようになり、最近になってウェーバーのロシア革命論第一論文「ロシアにおける市民的民主主義の状態」を全訳の形で（原注を一部省略した所があるが）発表したことは、先にも触れた所である。優れて市民的民主主義のロシアにおける定着可能性の問題に焦点

を当てたウェーバー・ロシア革命論が、その豊かな内容にもかかわらず、その原論文の発表当時でも（1906年）、第一論文「ロシアにおける市民的民主主義の状態」の翻訳が直ちになされたことを除けば、目立った反応が見られなかったこと（本稿(1)、本誌第10巻第３号、168－170ページ参照）、またソ連時代に入ってからは、その論文の存在すら長らくまったく忘れ去られていたことを考えるならば、クスタリョーフによるウェーバー・ロシア論（第一論文）の全訳紹介は、大きな意味を持っているといわなければならない。ウェーバーのロシア革命論は、その問題設定及びその内容からして、再資本主義化と民主主義的な立憲制への移行を課題とする今日のロシアにおいて、まさにアクチュアルな意義を持っているからである。

クスタリョーフは、彼の言うところによれば、1970年代の初めにレニングラードの図書館で、ウェーバーのプロテスタンティズム論への関心から、『社会科学及び社会政策アルヒーフ』を読んでいて、たまたま同誌に掲載されていたロシア論に遭遇したということである[20]。そして、その後亡命先で、彼はその翻訳を開始し、それをいくつかの在外ロシア語雑誌に掲載することを試みたが、結局先に触れた『シンタクシス』（パリ）がこれを引き受けたのであった（しかし、ほんの一部分の翻訳に過ぎなかったが）。しかしながら、彼の書いたものを読んでみると、クスタリョーフは必ずしもウェーバーに通暁している人物とは思えないし、また、長く在外生活にありながらも、ウェーバーのロシア論に関しては――リチャード・パイプスの先駆的な研究[21]があることは知っているようだが――、西欧におけるウェーバー・ロシア論の研究については必ずしも詳しい知識を持っているようには見うけられない[22]。クスタリョーフのそうした事情を察したのであろうか、彼がロシアの雑誌に初めてウェーバーのロシア革命論を紹介した論文（上記㉟の論文）に対して、ダヴィードフは厳しい批判を寄せている。その批判のポイントは、ロシア自由主義の将来に関するウェーバーの見解の評価にあった。クスタリョーフが、一口でウェーバーの見解を「ペシミズム」だと締めくくった点を掴まえ、ダヴィードフは、ごくごく近い将来についてはともかく、

広くロシアにおける自由主義の将来の展望については、ウェーバーは決して「絶望」を表明していたわけではないということ、その証拠として、ロシア論においても、ウェーバーは「物質的利害状況」(materielle Konstellation) の「流れに抗して」、自由を求める「国民の断固たる意志」がある限りという重要な限定を付していたことに、特別な留意を払う必要があることを強調した（前掲㉗のダヴィードフ論文参照）。クスタリョーフとダヴィードフの意見の相違の背後には、ウェーバーの著作に対する読みの深さのみならず、ウェーバーの「世界観」全体についての理解の仕方にある種の相違がひかえているように見える。

クスタリョーフに対して、メドゥシェーフスキーの一連の研究は、ウェーバーを含めて西欧の政治学の諸理論に通じた専門的な研究であり、それを駆使してロシアの近代政治史を描こうとする試みである。したがって、彼の研究はロシアの歴史学界にはこれまで見られなかった新しい潮流を代表するものといえる。史的唯物論の立場に立つものを除けば、これまでロシア自由主義および立憲主義思想の研究がロシアでは十分なされてこなかっただけに、新たな角度からロシアの立憲主義思想の掘り起こしを行う彼の研究も、ロシアの学問世界では、それはそれとして貴重なものということが出来る。しかし、その場合、メドゥシェーフスキーが拠って立つ視角は、基本的には、伝統社会から市民社会へという意味での近代化論であって、そうした視角と方法論それ自体は、われわれの眼から見れば、さほど目新しいものということは出来ない[23]。

ウェーバーのロシア革命論そのものを取り上げた彼の論文は、上記㊶の論文であるが、ロシア側に残されたアルヒーフ資料も使ってウェーバーと同時代のロシア人学者との交流にも触れているし（この分野の研究では、上記㊲のプロトニコフとコレロフのアルヒーフ研究もロシア側の研究として、われわれに貴重な資料を提供してくれた。本誌、第10巻第３号、180－181ページ、及び194ページの注(51)参照）、ウェーバー・ロシア論の紹介自体も、クスタリョーフに比べれば、格段に内容の濃いものとなっている。さらにウェーバーのロシア論から示唆されたものと推測されるが、彼には19世紀末から20世紀初めのロシア

自由主義の「三つの憲法草案」を検討した論文もある（上記㊹、㊺の論文）。しかし、彼がウェーバーから直接学んだものは、やはりなんといっても「外見的立憲主義」Scheinkonstitutionalismus（ロシア語ではмнимый конституционализмと彼は翻訳している。）の概念であろう[24]。メドゥシェーフスキーは、古典的な自由主義国家の確立後19世紀末から20世紀初頭に生じた西欧の政治社会の変化に注目して、これを基本的に「大衆社会への移行」の現象と捉え、この世界史的な波の中で、ロシアを含むドイツ、イタリア、スペインなど、民主主義的伝統を欠いた絶対主義国家が「追いつき型の発展＝近代化」を推進する時生じる政治変化を「外見的立憲主義」（〈мнимий конституционализм〉）の概念で捉えることが出来ると主張する。彼は一方で、この「外見的立憲主義」の概念の再構成を試みながら[25]（上記リストの㊷、㊸）、その概念を広く西欧諸国の近代政治史の中で検証するとともに、この概念を使って、19世紀半ばの農民改革以前からペレストロイカ期、そして社会主義解体後のエリツィン体制にいたるロシアの近代政治史の一貫した流れを整理しようと試みている。彼のそうした研究の試みは、まずは上記㊹の論文に現れたが、最近出版された彼の大著『民主主義と権威主義』（上記㊽の文献）にはそれが集大成した形で見られる。かくして、われわれは、メドゥシェーフスキーの比較政治史研究の中に、はるか20世紀初頭に著わされたウェーバーのロシア革命論が、現代のロシアの学問に直接的な影響を与えている事例を見ることが出来るのである。

また、ウェーバーの政治論との関連で彼の研究の中で特筆すべきことは、上記のリストに見られるように、彼にはオストロゴールスキー研究があるということである。周知のように、M.Я. オストロゴールスキー（M.Я. Острогорский, 1854-1919）はロシア出身の政治学者であり、1906年には第一国会の議員になったこともあるが、イギリスとアメリカを中心とした彼の政党の比較社会学的研究は、20世紀初頭の大衆民主主義化との関連で、ウェーバーの関心をひいたこともよく知られていることである。このオストロゴールスキーの著作『民主主義と政党』（原著フランス語、*La démocratie et l'organisation des parties*

politiques, Paris, 1898. 英訳は、*Democracy and the Organization of Political Parties,* 2 vol., London and New York, 1902.) は、すでにソヴェト時代の1927年と1930年に上下２巻本の形でロシア語訳が出版されているが[26]、最近になって、メドゥシェーフスキーはこのロシア語訳の復刻編集を行っている（㊼の著作）。ちなみに、メドゥシェーフスキーはオストロゴールスキーの思想を「過去の古典的政治理論とウェーバー及びミヘルスその他の現代西欧政治学に代表される20世紀の政治社会学とを結び付けるもっとも重要な環であった」と位置づけている[27]。さらに、彼には19世紀末から20世紀初頭にかけてのロシアの社会学史を通観した著作もあることを付け加えておこう[28]。

５）ロシア革命論とは別に、ウェーバー社会学の重要なカテゴリーである「官僚制」や「カリスマ論」などもペレストロイカの開始とともに、80年代後半頃から、旧ソ連の政治体制の批判的分析の手段としてあらためて注目されるようになった。もとより、ウェーバーの官僚制論などは、すでにペレストロイカ以前にも、研究が無かったわけではない。60－70年代にレニングラード大学を中心にして、それぞれ短文のものではあるが、いくつか紹介が試みられた事実がある[29]。しかし、ロシア社会が抱える実践的な課題との関連で、ウェーバーの支配の社会学や組織と管理に関する社会学が、肯定的な文脈で紹介され、詳しく検討されるのはやはりペレストロイカ開始以後のことである。更に今日では、ロシアでは、政治社会学のみならず、労働社会学、文化社会学など社会学が広い分野に広がって一種の流行の学問分野となっているが、こうした社会学のそれぞれの分野で、ウェーバーの官僚制論やカリスマ論の研究が進められているわけである。われわれの眼に留まったかぎりで主なものを挙げれば、下記のような文献がある。

㊾ヴェ・ペ・マカレンコ「ウェーバーの官僚制論と組織と管理のブルジョア的諸概念」（В.П. Макаренко, Теория бюрократии М. Вебера и буржуазные концепции организации и управления, *Вопросы философии*, 1986, №3.）

㊿ア・エム・ミグラニャン「西欧の民主主義理論の危機」(A.M. Мигранян, Кризис теории демократии на Западе, *Вопросы философии*, 1986, №.9.)

51同「マックス・ウェーバーの人民投票的民主主義論と現代政治過程」(Он же, Плебисцитарная теория демократии Макса Вебера и современный политический процесс, *Вопросы философии*, 1989, №.6.)

52エル・ペ・シパーコヴァ「マックス・ウェーバーの社会学におけるリーダーシップの諸類型」、及び翻訳ウェーバー「カリスマ的国家」(Р.П. Шпакова, Типы лидерства в социологии Макса Вебера; М. Вебер, Харизматическое государство, пер. из немец. Р.П. Шпаковой, *Социологические исследования*, 1988, №.5.)

53同「政治権力の正統性：ウェーバーと現代」(Она же, Легитимность политической власти: Вебер и современность, *Советское государство и право*, 1990, №.3.)

54ヴェ・ゾーリキン、エル・ゾロタリョーフ「職業としての政治：マックス・ウェーバー」(В. Зорькин, Р. Золотарев, Политика как призвание и профессия, Макс Вебер (1864-1920), *Новое время*, 1990, №21.)

55エム・ヴェ・マスロフスキー『マックス・ウェーバーの官僚制論と現代政治社会学』(М.В. Масловский, *Теория бюрократии Макса Вебера и современная политическая социология*, Нижний Новгород, 1997.)

56同「マックス・ウェーバーの家産制概念とソヴェト・システム」(Он же, Max Weber's concept of Patrimonialism and the Soviet System, *Sociological review*, 1996, vol.44, no.2, pp.294-308.)

57ユ・エヌ・ダヴィードフ「全体主義と全体主義的官僚制」(Ю.Н. Давыдов, Тоталитаризм и тоталитарная бюрократия, *Наука и жизнь*, 1989, №.1.)

58同「全体主義と官僚制」(Он же, Тоталитаризм и бюрократия, *Политическое самообразование*, 1989, №16.)

⑲同「全体主義と技術」（Он же, Тоталитаризм и техника, *Политические исследования*, 1991, №4.）

⑳ペ・ペ・ガイデンコ、ユ・エヌ・ダヴィードフ「マックス・ウェーバーにおける官僚制の問題」（П.П. Гайденко, Ю.Н. Давыдов, Проблема бюрократии у Макса Вебера, *Вопросы философии*, 1991, №3.）

㉑ペ・スタムボリチェフ「正統的秩序：マックス・ウェーバー（1864－1920）」（П. Стамболичев, Легитимный порядок, Макс Вебер (1864-1920), *Новое время*, 1995, №26.）

ペレストロイカの開始当初からの改革派で、有名な政治学者・政治評論家であったミグラニャンにも、ウェーバー論があるのは意外な感じを受けるだろうが、ここからも旧ソ連社会主義の政治体制批判のために、ペレストロイカの初期からウェーバーの官僚制論が利用されたことは明らかである。後でも詳しく触れることであるが、ダヴィードフのウェーバー官僚制論はソ連社会主義のスターリン体制を、ナチスのそれとならべて、「大量弾圧」と「ピストルの支配」とを不可欠の要素とする「全体主義」ととらえたうえで、ウェーバーのいう「支配の３類型」の枠組みを越える、まったく新しい官僚制支配の類型と捉えるべきだというものであって、ウェーバーの「予想しえなかった」タイプの官僚制の出現を論じているものである。またマスロフスキーは、ウェーバーの家産制概念に注目する数少ない研究者であって、彼の研究には、ダヴィードフとは違って、旧ソ連の官僚制についても「家産制的官僚制」の概念でもって理解しようとする試みが見られる。西側の研究においても、またとくに天皇制的官僚制の経験を持つ我が国では、かつて、一部のウェーバー研究者の間にそうしたアプローチを試みる雰囲気があったが、マスロフスキーのような研究者がロシアのウェーバー研究にも現れてきたことそれ自体は、興味なしとはしないけれども、しかし、ロシアと日本の歴史的精神的土壌には大きな差異があることを考えると、そうした試みがたとえばスターリン体制とソ連官僚制の特質を

把握するために有効かどうかという点についていえば、筆者には疑問に思われる。

６）最後に、歴史学の分野からウェーバーへの関心がありうる。前稿で述べたように、ソ連時代の初期、1920年代には、ウェーバーへの関心が主としてこの分野、特に西欧古代・中世史研究の分野から始まったこと、しかし、そのさい、ウェーバーの理念型概念を中心とする歴史学方法論の問題に限られていたとすれば、今日の場合は、以下に見るようにその対象は広がって、問題も多様なものになっている。

㊷ヴェ・エヌ・ヴィノグラードフ「マックス・ウェーバーと『自由帝国主義』(В.Н. Виноградов, Макс Вебер и “либеральный империализм”, *Новая и новейшая история*, 1988, №.２.)

㊸エ・エス・クーリィピン「マックス・ウェーバーと中国：偉大な学者は何を見なかったか、なぜ見なかったか？」(Э.С. Кульпин, Макс Вебер и Китай; что и почему не увидел великий ученный? *Проблемы дальнего востока*, 1990, №.３.)

㊹同「マックス・ウェーバーと中国：ヨーロッパの学者は中国をどう見ていたか」(Он же, Макс Вебер и Китай; каким его видел европейский ученный, *Проблемы дальнего востока*, 1990, №.５.)

㊺同『中国における人間と自然』「序論、中国の歴史発展の特殊性の原因」(Он же, Введение, Поиск причин специфичности исторического развития Китая, *Человек и Природа в Китае*, М., 1990.)

㊻エス・イ・ジューク「マックス・ウェーバーと社会史」(С.И. Жук, Макс Вебер и социальная история, *Вопросы истории*, 1992, №.２-３.)

㊼ア・イ・パートルシェフ『ウェーバーの脱魔術化した世界』(А.И. Патрушев, *Расколдованный Мир М. Вебера*, М., 1992.)

㊽「円卓会議」資料「ロシア的近代化；諸問題と展望」(Российская модер-

низация; проблемы и перспективы (материалы《круглого стола》), *Вопросы философии*, 1993, №.7.)

⑲エヌ・エヌ・ザルービナ「近代化と経済文化（マックス・ウェーバーの概念と現代の発展理論）」(Н.Н. Зарубина, Модернизация и хозяйственная культура (концепция М. Вебера и современные теории развития), *Социологические исследования*, 1997, №.4.)

⑳同『経済発展の社会文化的諸要因：ウェーバーと現代的近代化論』(Она же, *Социокультурные факторы хозяйственного развития: М. Вебер и современные теории модернизации*, СПб, 1998.

㉑同『経済と企業の社会-文化的基礎』(Она же, *Социально-культурные основы хозяйства и предпринимательства*, М., 1998.)

この分野では、中国史研究の領域からウェーバーの「儒教と道教」に着目した研究があること（クーリピンの研究）とドイツの史学史研究からウェーバーに接近していったパートルシェフの研究がわれわれの気を引く所である。パートルシェフのモノグラフ『ウェーバーの脱魔術化した世界』は19世紀末から20世紀初頭、並びに第一次大戦と革命期のドイツの史学史の中で、ウェーバーの位置づけを与えようとするものである(30)。本書を通してみると、本体部分はウェーバーを「ブルジョア史学」として批判的に言及する旧来のソヴェト史学のウェーバー像が基調をなしており、それに対して、序文や最後の章には、ダヴィードフ等の研究を通じて西欧のウェーバー新研究の成果を一部受容する姿勢も見られる。その点で、ややちぐはぐな印象を読者に与える著作であり、したがって、またロシアにおけるウェーバー研究が転換する様を一書の中に映し出しているようにも思える、そんな著作である(31)。とはいえ、この「ちぐはぐさ」がまた、本書が出版された当時のロシアにおける一般的な雰囲気を反映しているとも言うことが出来よう。おそらくそれが、再開されたロシアのウェーバー研究の実態であったのではなかろうか。

歴史学の分野で、やや新しい研究方向が見られるとすれば、先に述べた第二のジャンル（エートス論、労働倫理に関連する分野）でも挙げたことのあるザルービナによる文化史的研究であろう。彼女の研究は、大枠から言えば、近代化論の一つと言うことが出来るが、その場合、各国の経済発展と当該社会の「文化類型」との相関を問題とする点に、その特徴が見られる。しかも、とりわけ彼女が問題とするのは企業家のタイプを規定する各国の「経済文化」の類型であり、こうした観点から、ウェーバー宗教社会学が彼女の視野に入ってきたのである（文献㊾、㊿）。彼女はウェーバーの宗教社会学を援用して、広く世界の文化類型の問題に取り組んでいる（文献(71)）。

さて以上が、1980年代後半に始まるペレストロイカ以後ポスト・コミュニズム段階の今日まで、われわれが眼にし得た限りの現代ロシアのウェーバー研究全体をまとめてみたものである。そこからは、ウェーバーが残した学問的遺産をアクチュアルな問題として受け止める、「ロシアにおけるウェーバー・ルネサンス」現象の特徴が少しは伺えたかと思う。本稿がこれまで考察してきた「ロシアにおけるウェーバー」という枠組みの中で、この現代のウェーバー研究の特徴はどんな所にあるといえるのであろうか。最後にすこしくまとめをしておこう。

第一に、研究論文の数は飛躍的に増大したけれども、われわれがまとめてみたいずれのジャンルでも、それぞれの論文の水準には精粗の差が歴然としてあるし、全体としては、国際的なウェーバー研究の水準からみて、決して高いものとはいえない。その意味では、やはりロシアにおけるウェーバー研究は本格的にはまだまだこれからというところであろう。第二に、研究分野の面から言うと、20年代のウェーバー研究がもっぱら西洋古代・中世史学の分野で行われ、しかも歴史学方法論（社会科学の方法論と理念型論）への関心が中心であったとすれば、今日ではウェーバー研究が様々な学問分野に広がっていることは明らかである。しかし、その中でも「社会学」が研究の中心分野となっているこ

とを指摘することが出来よう。周知のように、旧ソ連時代にはマルクス＝レーニン主義の公式イデオロギー支配があって、ロシアでは「社会学」が自立した学問分野として認知されるまでには大きな困難があったけれども、しかし今日では「社会学」が完全に独立した学問分野として確立したばかりでなく、どの分野にも増して急速に発展している事実がある。「ウェーバー・ルネサンス」もまたこうした現代ロシアの学問事情の変化と深く結びついているのである。そしてまた、そのなかでも「理論社会学」とロシアで呼び慣わされている分野が、今日のウェーバー社会学研究の発展を領導しているといってよい。われわれが注目するユーリー・ダヴィードフは、まさしくこの学問分野の確立に――おそらくマルクス主義の理論体系に代わる新しい理論体系を模索する試みとして、であろうが――これまで力を尽くしてきた人物なのである。

次にウェーバー研究の内容の面から、現代ロシアの研究の特徴をまとめてみよう。まず第一に、社会主義体制の崩壊から政治的民主化と再資本主義化へという大きな社会的転換を遂げた現代ロシアの特殊な条件の下で、ウェーバーの著作が「近代化」並びに「市民社会の形成」という広い意味での「近代化論」の枠組みのなかで捉えられる傾向が強く現れているということが出来る。（ロシアの「文明化」というのが体制転換の過程で多くのロシア人を捉えた一つの合言葉であったが、それはしばしば「西欧化」と同義語として受け止められることがこれまでは多かったように思う。）しかし、第二に、この民主化と近代化が現実には順調に進まないという現状があり、そこから、それはロシアにおいては単なる「西欧化」ではありえない、ロシアの民主化と資本主義化のためには、やはりロシアに固有な条件を十分考慮に入れたものでなければならないこと、そのためには、ロシアの精神的な伝統あるいはロシアの「メンタリティ」への配慮を欠くわけにはいかない、といった強い要請が同時に生まれている。こうした現状に対する批判的な観点がまた、ウェーバーへの関心を一層掻き立てている事情も指摘することが出来るであろう。しかしまた、第三に、20世紀末ロシアの「再資本主義化」それ自体が、グローバリゼーションという新たな

世界史的状況の下で起こったことであり、西欧ではすでにポスト・モダンへの思想的趨勢が明確になりつつある事情の下で、しかもロシアではペレストロイカ以降いわば「文化的開国」として一挙に現代西欧の諸思想が流入した結果、ウェーバー研究の磁場においては（も）、近代西欧合理主義に対するウェーバーの批判的な精神にも目が向けられるようになっている（とくにダヴィードフの研究にはそうした側面への着目がある）。このこともまた、現代ロシアのウェーバー研究で見落としてはならない特徴の一つである。

かくして、一方では近代化と市民社会化という当面する固有の課題があり、そして他方では国際的なウェーバー研究の主要な傾向とも交わる近代合理主義批判の観点もまた要請される、こうした二つの課題が同時に立ち現れている所に、今日のロシアにおけるウェーバー研究の特徴があるといえるのではあるまいか。このように見てくるならば、もともと「近代」という時代に対するウェーバーの態度は、今日の内外の研究が示しているように、一筋縄では掴まえきれないからこそ、ウェーバーへの関心がいまなお失われないのであるが、近代合理性の把握をめぐって「アンチノミー的な思想構造」（W．J．モムゼン）[32]を持つといわれるウェーバーの思想が、上記のような事情にある現代ロシアではなおのこと、アクチュアルな思想的問題として受け止められる理由があったのだということが出来る。まさにこうした意味あいにおいて「ロシア思想史におけるウェーバー的問題」を提起していると思われるのが、ユーリー・ダヴィードフの研究である。これまで後回しにしてきた彼の研究を以下では詳しく検討してみようと思うが、彼のウェーバーとの出会い、そしてウェーバーへの接近の歩みは、戦後ソ連社会主義の時代にあって、さながら一つの思想史的ドラマを形成しているようにも思える。したがって、この点についてもあわせて紹介しておこうと思う。これまでも、しばしば言及してきたように、今日見られるロシアにおける「ウェーバー・ルネサンス」の現象は、確かにペレストロイカの開始以後顕著な形で現れたことは確かなことであるが、しかし、ここにつながるウェーバー新研究は、それに先立つ20年も前、1960年代末－70年代に「発酵」

し始めていたからである。（未完）

〔1999年6月27日脱稿。なお、本稿は1997年度文部省在外研究の成果の一部である。〕

注

（1） ネウスィーヒンのウェーバー研究以後は、われわれは1920年代末－30年代初めに、二つの論文を見るのみである。В.С. Сергеев, Западная социология в период《высокого》и《организованного》капитализма, *Историк-марксист*, 1929, №12, с.238-268. Ф. Капелюш, *Религия раннего капитализма*, М., 1931. いずれも「ブルジョア歴史学」攻撃の開始となった1928年3月のマルクス主義歴史家協会の討論会以後のものであって、20年代のウェーバー研究の最後の余波を示すものといえよう。それと同時に、階級的＝イデオロギー観点が強く前面に打ち出されているのが特徴である。前者セルゲーエフの論文は、1890年代ドイツにおける「ブルジョア的イデオロギー」の「危機」から、ジムメル、ウェーバー等の「社会学」が出てくる問題を論じたものであり、後者カペリューシの著書は、カルヴィニズムを初期資本主義のイデオロギーとして捉えて、その政治的及び経済的役割、並びにその宗教的教理を論じたものである。カペリューシの場合、ネウスィーヒンと同じく「マルクス」と「ウェーバー」とを対比させるという枠組みに立つが、ウェーバーについては、ネウスィーヒンほどの掘り下げはみられず、「マルクスの唯物論対ウェーバーの観念論」という図式で貫かれている。ウェーバーの「プロ倫」に多少とも立ち入ったものとしては、これが最後のものとなった。

（2） 「現代ロシアのウェーバー研究」という場合、われわれはここでは、さしあたり1980年代後半に始まるペレストロイカ以後の研究のことを念頭においている。30年代－40年代には、ウェーバー研究は皆無であったと言ってよいが、戦後の50年代の末になって一つだけ孤立した形で論文が出ている。西欧中世史家のア・イ・ダニーロフの論文「第一次世界大戦と革命期1918－1919年におけ

るドイツの『自由主義的潮流』のブルジョア的歴史家達」がそれである。A. И. Данилов, Немецкие буржуазные историки《либерального направления》во время первой войны и революции 1918-1919 годов, *Новая и новейшая история*, М., 1958, №5, с.111-124. これはドイツ史学史の研究分野のものであって、ドイツ「自由主義派」の歴史家の中で、ウェーバーが占めていた独自な立場に光を当てたものである。そのなかでは、ウェーバーのドイツの内政民主化論と第一次世界大戦に対する態度もかなり詳しく解明されていて、ウェーバーの政治論に関するソ連の研究では最初のものではあるまいか。この時期のものとしては、出来栄えのよい論文であるとの印象を受ける。彼の別のモノグラフにも、西洋の初期中世史研究の分野のものであるが、ウェーバーも含むドイツの歴史学方法論の史的考察が含まれている。A.И. Данилов, *Проблемы аграрной истории раннего средневековья в немецкой историографии конца XIX-начала XX века*, М., 1958. とくに、часть первая. なお、A. И. ダニーロフは、本稿(2)でも触れたように、1955年にペトルシェフスキー論を書いて、かつてのネウスィーヒン及びコスミンスキーのペトルシェフスキー擁護論への批判を展開した正統派の歴史学者であり（本稿(2)、本誌第11巻第１号、113ページ及び133－134ページの注(30)(37)を参照）、1960年代末－70年代の「逆流」の時代には、A. Я. グレーヴィチ（A.Я. Гуревич）らの中世史学の新しい動きに対して、党のイデオロギー機関誌『コムニスト』に依って、厳しい批判を浴びせたことでも知られている。A.И. Данилов, К вопросу методологии исторической науки, *Коммунист*, 1969, №5. また1963年に刊行された『ソヴェト歴史百科事典』第３巻（1963年）所収の「マックス・ウェーバー」の項目の執筆者は彼であった。*Советская историческая энциклопедия*, М., 1963, Т.3, с.17-18.

ア・イ・ダニーロフの上記論文は50年代に出た例外的なものであるが、しかしそれ以後ペレストロイカが始まる前の60－70年代にも、もちろんウェーバー研究がまったく無かったというわけではない。しかしこの時期のものは、何かひとまとまりの現象として、われわれの眼に入ってくるものではなかった。とはいえ、そのことは、この時期の研究が重要ではなかったということではない。60－70年代のウェーバー新研究の胎動については、後論の中で別途言及することにしたい。

（3） 本稿(2)、本誌第11巻第１号、143－144ページ、補注(2)参照。

（4） 後の議論との関連で、もう一点付け加えておけば、著作集①に収録された『職業としての学問』の翻訳者はガイデンコである。彼女の手になる翻訳は、1979年にイニオンの刊行物にはじめて掲載された。この翻訳出版が持つ意味については次章を参照されたい。

（5） なお、ウェーバーの主著の一つとこれまで考えられてきた――しかし今日国際的なウェーバー研究のレヴェルでは、死後出版されたこの著作の現行版の構成そのものに、大きな疑問が提示されているのは周知の通りであるが――『経済と社会』は、これまでの所まだ全体の形では紹介されていない。ウェーバーの政治論についても、『職業としての政治』（前掲著作集①所収、翻訳者はA. Ф. Филиппов、彼はジムメルの研究者である。）と講演『社会主義』（Макс Вебер, Социализм, реч для общей информации австрийских офицеров в Вене (1918 г.), перев. В.А. Гуторова, *Вестник московского университета, сер. 12, социально-политические исследования*, 1991, №2, с.42-64.）を除けばまだ翻訳はない。

（6） 本稿(2)、本誌第11巻第１号、129ページ、及び142ページ注(64)参照。

（7） その他に、エル・ペ・シパーコヴァ編『論集・マックス・ウェーバー、今日の読み方』（Под ред. Р.П. Шпаковой, *Макс Вебер, Прочитанный сегодня. Сборник статей*, СПб., 1997.）があるが、筆者は未見。

（8） Piama P. Gaidenko, Jurij N. Davydov, *Rußland und Westen, Heidelberger Max Weber-Vorlesungen 1992*, Suhrkamp, 1995, S.222. Ю.Н. Давыдов, *Макс Вебер и современная теоретическая социология; Актуальные проблемы социологического учения*, М., 1998, с.405.

（9） Piama P. Gaidenko, Jurij N. Davydov, *Rußland und Westen, Heidelberger Max Weber-Vorlesungen 1992*, Suhrkamp, 1995, S.214.

(10) ダヴィードフとは研究分野を異にし、また思想的信条も異なる所があるとはいえ、ロシア農民史の大家ヴィクトル・ダニーロフがたどったソ連農民の集団化研究の軌跡も、同じく真摯なソヴェト・インテリゲンツィアが取り得た「主体的な」研究の別の一例であることを、われわれは最近の奥田央氏の論稿から伺うことが出来るように思う。奥田央「ダニーロフ　ヴェ・ペ(1)―1920年代ロシア農民史のために―」東京大学『経済学論集』第64巻第４号、1999年１月

所収。ダニーロフのソ連農民史の場合にせよ、われわれのダヴィードフの場合にせよ、とくに60年代末から70年代（ブレジネフ期）のソヴェト・インテリゲンツィアが置かれた「苦難の時期」のことに、あらためて深く想いを到さなくてはならないと思う。

(11)　ペレストロイカの開始に当たって、ある機会にゴルバチョフは「建前と本音」とが「乖離した」ペレストロイカ前のソ連社会（いわゆる「停滞の時代」）を「道徳的に不健全な状態」と指摘したことがあるが（そして、ここから「歴史に空白があってはならない」という議論がでてきた）、このとき国の指導者のそうした発言が、こうした「複雑な心性」のなかで苦悩してきたソヴェト・インテリゲンツィアの心にどれほど強く共振するものであったか、と想像するのは筆者だけではあるまい。

(12)　その際彼が取る方法は、一方では、ウェーバー理論の光でもってロシアの歴史と現代の問題を浮かび上がらせ、他方では逆に、彼自身のロシア思想史の研究と現代ロシア社会認識からウェーバー理論そのものをも再吟味するという方法である。こうした彼の「ウェーバーとロシア」問題への、いわば両面作戦のアプローチが印象的である。その結果、ダヴィードフのウェーバー論には一定の「ウェーバー批判」が含まれることにもなる。次章を参照のこと。

(13)　こうしたわれわれの評価が当たっているかどうかは、専門のウェーバー研究者の判断を仰がなくてはならない。後論で彼の研究を、時に必要以上にと思われるほどにこと細かく紹介するのはそうした意図による。

(14)　従来からロシアの研究者の間には、洋書を私費で購入する習慣というものがそもそも無いように思われるのであるが、しかし現在ではそれの自由な購入が可能になったとはいえ、昨今の研究者の経済状況をみれば、高額な研究書を今私費で購入することなどとても無理な相談である。一言つけくわえておけば、筆者が1998年３月末から99年１月までモスクワに滞在して、ダヴィードフに会った時、ドイツ語版ウェーバー全集を持参して来なかったので、どこかの図書館で見られないかと尋ねたら、彼は歯ぎしりしながら、「ニチェヴォ・ネット」（「一冊も無い」）と答えたものである。刊行された全集版の最初の巻の３分の２が日本で購入されたという話を聞かされると（佐野稔「ドイツの一歴史家の見た日本のヴェーバー研究」『思想』1999年６月号、133ページ）、これからもロシアのウェーバー研究の前に立ちはだかる大きな、そして――しかし、か

つてのそれとはまったく性質の異なる――「新たな」困難のことを思わずにはいられない。ちなみに、ダヴィードフの場合は、ドイツ人学者の友人たちの「好意」に依存しているとのことであった。

(15) 1998年夏のロシア金融危機を契機にして、プリマコフ政権が誕生した時、ペトラコフ、アバルキン等科学アカデミー経済部の「アカデミーク・グループ」による経済政策の転換のための緊急提言が当地の新聞に報道されたことがあるが、そのなかで、彼らは、生産政策の優先、国家による一定の市場規制、ルーブリ増発などの具体的措置（これをもって彼らは「社会的に志向され、効率的に規制された市場経済への移行モデル」とよんでいる）を提案するとともに、「ロシアの歴史と文化」に根差した「国のもっとも豊かな、そして多くの点でユニークな科学的精神的なポテンシャル」を十分考慮に入れた経済政策を練り上げる必要性を強調した（「国民経済発展の基本方向」*Коммерсантъ*, №. 170, 15 сентября 1998 г. с. 8 .)。レオニード・アバルキン（ロシア科学アカデミー経済研究所所長）の場合は、後者の点についてもっとはっきりと次のように述べている。今日、全世界的な発展傾向を見据えつつ、これをロシアの特殊性に結び付けた発展戦略と経済モデルの作成が課題とされているが、そのためには「富」や「所有」に関する「集団主義と共同性の精神」、そして「平等や社会的公正」に関する伝統的観念、「民族を超えた文化的に普遍的な国家性の形式」としてのロシアに独自な国家性の観念など、一言で言えば「ロシアのメンタリティ」を充分に考慮に入れる必要がある、と（Леонид Абалкин, *Выбор за России*, М. 1998, с.20.)。かつてソ連社会主義の解体期に、いわばソフトランディングの経済改革を主張した（そして当時は敗れ去ったわけだが）アカデミーの経済学者達が今日、ガイダール＝チュバイス路線による従来の経済政策を転換させる必要性を語る時、こうしたロシアの伝統的な「メンタリテート」の問題を強調しているという事実の中にも、現代ロシア社会に「ウェーバー」を受容する雰囲気が一段と広範囲に広がっていることが伺えるのではあるまいか。

(16) 民主化と市場経済への移行に伴なって、ロシア社会が直面した課題との関連で、ウェーバーのエートス論がいまロシアで注目されている状況を紹介した袴田茂樹氏の報告がある。本稿の全体と対照させながら、参照されたい。袴田茂樹「ロシアにおける『マックス・ウェーバー・ルネサンス』をめぐって」『ロシア・東欧学会年報』第27号、1999年４月。同「ロシアにおける社会・経済的危

機とマックス・ウェーバーの再評価」皆川修吾編『移行期のロシア政治』渓水社、1999年、所収。なお、ウェーバーの著作のロシア語訳に関する問題で、氏はウェーバー・ロシア革命論の第二論文「ロシアの外見的立憲制への移行」も1906年にロシアで翻訳が出版されたと書いておられるが（後者の論文、91－92ページ）、それが事実とすれば、われわれにとってはきわめて重要な情報なので、情報の出所と事実の詳細を明らかにしていただきたいと思う。

(17)　また、この点に関連して、ウェーバー研究そのものとはいえないが、ロシア正教の労働倫理と西欧のプロテスタンティズム並びにカトリシズムのそれとの比較研究を試みたものとして、たとえば、Т.Б. Коваль, "*Тяжкое благо*", *Христианская этика труда, Православие, католицизм, протестантизм, Опыт сравнительного анализа*, М., 1994. といったものもある。また、経済思想史の研究分野でアダム・スミス、ケインズ、そしてセルゲイ・ブルガーコフの経済理論の倫理的基礎について分析したH. A. マカショーヴァの研究も注目される。Н.А. Макашева, *Этические основы экономической теории, очерки истории*, ИНИОН, М., 1993.

(18)　В. Зомбарт, *Буржуа : Этюды по истории духовного развития соврменного экономического человека*, издание подготовили Ю.Н. Давыдов и В.В. Сапов, М., 1994.（最初のロシア語訳はモスクワで1924年に刊行）

С.Н. Булгаков, *Философия хозяйства*, М., 1990.（原著は1912年刊行）

Он же, *Труды по социологии и теологии, Т. 1, От марксизма к идеализму, Т. 2, Статьи и работы разных лет, 1902-1942*, М., 1997.（*От марксизма к идеализму* の原著は1903年に刊行）

Он же, *Два Града; исследования о природе общественных идеалов*, М., 1997.（原著は1911年刊行）

Б.А. Кистяковский, *Философия и социология права*, издание подготовили Ю.Н. Давыдов и В.В. Сапов, М., 1998.（原著は1916年刊行）

(19)　本稿(1)、本誌第10巻第3号、162－163ページ参照。Макс Вебер, К состоянию буржуазной демократии в России, перев. К.А., *Синтаксис*, 1988, №22, с. 74-99, Он же, Переход России к псевдоконституционализму, перев. К.А., *Синтаксис*, 1990, №27, с.29-57. 翻訳者のペンネーム、К. А. はアレクサンドル・クスタリョーフであることが、本人の口から最近明らかにされた。

Александр Кустарев, Вебер и Россия, или приключения ткача в стране бичей и знахарей, *Рубежи*, 1997, no. 5, c.107.

(20) Он же, указ. соч., c.106. ここから、レニングラードの大学でも、1970年代の初めにウェーバー研究の一つの核があったことが推測される。後注(29)も参照。

(21) Richard Pipes, Max Weber and Russia, *World Politics*, vol.7, №3, 1955, Richard Pipes, Max Weber und Rußland, *Außenpolitik*, Bd.6, 1955.

(22) 欧米のウェーバー・ロシア論研究については、すでに我が国ではその書誌学的紹介が小島修一氏によってなされている。小島修一「ウェーバーのロシア革命論に関する研究動向——戦後の欧米諸国とロシア——」邦訳、マックス・ウェーバー『ロシア革命論II』名古屋大学出版会、1998年、「解題II」を参照。

(23) したがって、彼のウェーバー像としては、近代化論者＝市民主義者ウェーバーという像が彼の場合前面に強く押し出される結果ともなる。この点では、ダヴィードフの研究で描かれるウェーバー像と比べると、メドゥシェーフスキーのそれはやや単調なウェーバー像であるとの印象を免れないように思う。ただ、ダヴィードフには、ウェーバーの思想体系における大きな柱の一つである政治論そのものについての取り組みが欠落しているという、一つの問題点があるだけに、メドゥシェーフスキーのウェーバー論は今日でも数少ない貴重な政治論研究であり、彼の研究はウェーバー政治論の今日のロシアにおける研究水準を示すものと見ておかねばならない。

(24) ただし、この点については、若干のコメントを付しておくことが必要であろう。というのは、「外見的立憲主義」という用語自体は何もウェーバーの発案になるものではなく、マルクスもすでに使っていた概念であり、ウェーバーの同時代のドイツでも盛んに使われていた用語である。ウェーバーがロシア革命論でこの用語を使って、1906年４月ロシア帝国第一国会の招集の機先を制する形で、招集日の前日にツァーリの勅令として公布された国家基本法とそれに基づく体制を「外見的立憲制」と特徴づけたときには、「真の意味での」立憲主義ではない、というにとどまらない独特な意味合いが込められていた。すなわち、当時のウェーバーのロシア認識では、一方でツァーリ官僚制の「合理化」が進行したということと、今一つ——これが重要な点であるが——、ツァーリ体制の側の対外的な配慮の必要性から、すなわち西欧の金融資本から莫大な借款を確保するために、専制としての本質は変えることなく、この体制の対外的

な「信用力」を得るいわばその「手段」として、「立憲制」の〈Schein〉（「外見」）を取り繕う必要があったのだというウェーバーの独特な捉えかたが、この用語には込められていたのである（ウェーバーの言う、ロシア専制政府の「二重帳簿」政策。例えば、邦訳ウェーバー『ロシア革命論Ｉ』122ページ、同『ロシア革命論II』８－14ページ及び19ページを参照）。この点をわれわれが強調するのは、とりわけロシア政府の国際金融資本への対外的配慮と関連付けてロシア国内の政治体制の特質を見るウェーバーの観点は、その後も一貫して維持されたという事情があるからである。ウェーバーは、1917年にツァーリ専制が崩壊した（ウェーバー的に言えば「外見的立憲制」が崩壊した）後の臨時政府の体制についても、西側同盟国及び今度は主にアメリカの銀行家達から「信用力」をうる必要があるという、かつてのそれと同じ観点から、この新体制を「『外見的』民主主義」*Schein*demokratie と特徴づけている（この点については、邦訳ウェーバー『ロシア革命論Ｉ』所収の論文「ロシアの外見的民主主義への移行」(1917) 及び「ロシア革命と講和」(1917) を参照されたい。)。すぐれてこうした意味でのロシアの「外見的立憲主義」に関するウェーバーの特殊な意味付けに対して、メドゥシェーフスキーは特別な関心を払っているとはいえない。しかしながら、他方で彼は「君主」「議会」「政府官僚制」という三カテゴリーの相互関連に視点を据えたウェーバーの政治分析の特徴については、これを的確に掴まえていることも指摘しておかねばならない（㊷の論文、c.78-80)。メドゥシェーフスキーはそうしたウェーバーの手法に学びながら、ウェーバーが使用した「外見的立憲主義」概念の一般的な再構成に進んでいったものと思われる。

(25)　メドゥシェーフスキーに依れば、「外見的立憲主義」とは、制定された憲法が「社会」による「国家」の統制（「社会的統制」）の道具とはならずに、既成の（古典的な西欧民主主義国家の）立憲的体制を形式上模倣して、実際には伝統的権力の担い手を正当化する手段となっている体制のことである。その意味で「新しい（憲法的＝法治的）政治的形式と古い（絶対主義的＝君主主義的）政治的内容とのある種のハイブリッド」であるとされている。A.H. Медушевский, Что такое мнимый конституционализм? *Социологические исследования*, 1994, №2, c.71-72.

(26)　M.Я. Острогорский, *Демократия и политические партии*, M., 1927-

1930, T. 1-2.

(27) А.Н. Медушевский, *Демократия и авторитаризм; Российский конституционализм в сравнительной перспективе*, М., 1998, с.134.

(28) А.Н. Медушевский, *История русской социологии*, М., 1993.

(29) 1960－70年代のレニングラード大学には、モスクワのダヴィードフ、ガイデンコとはまた一味違うウェーバー研究があったことが推測される。例えば、リーマ・デヴァートコヴァ、エル・ペ・シパーコヴァといった人たちの研究である。管見の限りでは下記の文献がある。Римма П. Девяткова, Макс Вебер и проблема западной рациональности, *Вестник ЛГУ*, 1968, вып. 3, №17, с. 127-129. Она же, *Некоторые аспекты социологии М. Вебера, Критический анализ*, Л., 1969. Она же, Проблема власти в немецкой социологии конца XIX－начала XX в., *Вестник ЛГУ, Серия экономики, философии и права*, 1970, №23. なお、リーマ・デヴァートコヴァは『ソヴェト大百科事典』第3版の「ウェーバー」の項目の執筆者である。*БСЭ, 3-ое изд.*, 1971, Т. 4, с.1031-1032. Р.П. Шпакова, А.В. Дмитрев и П.Н. Лебедев, Макс Вебер и современная буржуазная социология (рационалистические концепции управления), *Вестник ЛГУ*, №11, 1963, с.76-87. Р.П. Шпакова, Критика теории харизматического лидерства, *Вестник ЛГУ*, №23, 1974, с. 75-84. レニングラードを舞台にした今日のウェーバー研究の中心メンバーは、シパーコヴァであろう。

(30) 前注(2)で触れたА・И・ダニーロフの研究や上記リストにみられるヴィノグラードフの論文（文献㊷）などを含めて考えると、まだわれわれの調査が行き届いていない点もあるが、旧ソ連時代からドイツ史学史に関する一連の研究の流れがありそうである。パートルシェフの研究はこうした流れから出てきたウェーバー論であると考えられる。

(31) 本書の本体部分の執筆年時と出版年時とに相当なずれがあり、この点を考慮すると、本書が本文で述べたような印象を与える理由の一つが理解できる。したがって、一見われわれに魅惑的な印象を与える表題「ウェーバーの脱魔術化した世界」というのも――近年西欧のウェーバー研究の大きな流れになってきた近代批判のウェーバー像というのではなくて――、実質的には、旧来の伝統的なソヴェト史学に特有なドグマからの解放というほどの意味なのであって、

それ以上の意味を期待すると裏切られることにもなる。

(32)　Wolfgang J. Mommsen, *The Political and Social Theory of Max Weber*, Polity Press, 1989. たとえば、p.24 f. を参照。